学ぶべき類、学ぶべき者―それはその場の身内か、私か、それ以外か。

松下 明男

今回の旅行は参加者の半数以上が中一。これだけの入部（6 月～9 月は仮入部）が集まったということは部としてもうれしいことだし、私も喜ばしく思う。

ただ、それだけの人数が同時に動くともなれば、問題が発生するのも無理はない。周囲からしてみれば、いるだけで迷惑な存在なのかもしれないし、歓迎されているのかもしれない。

私が鉄研の旅行に参加するのはこれが 4 回目だが、今回に関しては正直、今でも納得していない。旅行のプランだとか、写真があまり撮れなかったとか、そんな次元の問題ではない。

ただ、自分たちの行動に対して納得がいかなかっただけだ。

「自分たちの」とは言ったが、これは社会的な問題とも捉えることができる。むしろそう捉えたいし、これをご覧の皆さんにもそう捉えていただきたい。

これをご覧の方の中にも鉄道を趣味とする方がいるだろう。そんな貴方も興味を示したであろう事件が発生した。数年前、列車の行先方向幕を盗んだとして鉄道マニアが逮捕された事件だ。

社会的な問題である我々の行動と、この事件とは何が関係あるのだろうか。

それは、我々鉄道マニアの常識の無さに共通点が見られる。

あの事件に関しては、犯人である鉄道マニアが世の中の「常識」という名の「ルール」に則ることが出来ていれば、自分で自分をコントロールすることも出来ていただろう。

では、今回の旅行に参加した部員に無かった（不足していた）「常識」とは一体何だろうか。

それは、参加した部員の中でも、特に中一に言えることで、「マナーを守る」ということだ。

例えば、駅のホームで白線や黄色い線の外側を歩く、またはそこで写真を撮るということ。

これは、「マナーを守る」という「常識」に反していると同時に、自分たちにも危険が伴う。尤も、それを防止させてくれるための注意喚起のはずなのだが、結果、自殺的な行為に移されている。さらに、人間に伴う危険はこれだけに止まらない。進入してくる列車（の運転士）は、我々に対して危険を感じ、警笛を鳴らす。それを至近距離で耳にしている一般客の中には、「警笛の音が大嫌いで、聞いただけで気分を害する」という人もいるかもしれない。少し大げさかもしれないが、可能性を否定することはできない。

と、ホームにさりげなく引かれている白線や黄色い線から少しでもはみ出てみれば、これだけの人にこれだけの危険が伴い、同時に周囲に多大な迷惑をかけることになるのだ。

迷惑がかかるのは周囲だけでなく、身内である他の部員にもそうだ。たとえ、しっかりルールを守り、良識ある行動をとっている部員でも、それが出来ない人間と一括りにされては、周囲から苦情を受けかねない。実に理不尽な話だ。

被害は尽きない。マナーを守らない（守れない）マニアが多ければ、その駅や線区では列車等の撮影禁止ともなりかねない。他の鉄道マニアにも迷惑がかかると予想される。

そう考えると、この様にその場にいる全ての人間に迷惑がかかっているとも言える行動を今回の旅行でとった、或いは普段からとっている君たちの責任は極めて重大なものになる。

今回部員に不足していた常識はまだまだあり、特に写真を撮影する際である。

恥ずかしい事に、貪欲な部員たちは「我こそは」と、前へ前へと押し捲る。特に、マニアから人気の臨時列車においては他のマニアも多く撮影されていたりするので、それだけで迷惑がかかる。一般のマニアも加わった押し競饅頭が、先の危険を招く可能性も充分に考えられる。

これに関しては中一だけでなく、全ての部員が当てはまるため、中一の模範が如何こうどころか、鉄研そのものを問題視されかねない。その貪欲さは抑制できないものなのだろうか？

貪欲さといえば、始発の電車に飛び乗ってうれしそうに座席を確保していた部員もいた。これについては人間が特定されるので触れづらいが、私が見た中では少なくとも中一だけではなかった。顧問に注意された者こそ中一だけだったが。心当たりのある者は速やかに改善せよ。

他にも、ホームで走ったり、夜間の写真撮影時にフラッシュを焚いたりするなど、貪欲さを制御しきれずに守れなかったマナーは多く、また、夜行列車内での話し声の大きさなど、周囲に対する配慮においても不充分だったと考えられる。

半自動扉を珍しがってか、ドアの開け閉めを面白がった「悪戯」も発生した。怪我をしてからでは遅いということが君たちにはわからないのだろうか。

これら、問題点に関しては、何も鉄研の部員だけに限らず、私が個人的に出かけた際に見るマニアにも言えることだし、周囲から私がその様に思われているかもわからない。

ただ、これを私は鉄道マニアとしても、人間としても非常に恥ずかしいことだと思う。部員にも、他の鉄道マニアにも、私と同じように思っている人がきっといるだろう。

ただでさえ鉄道（だけで無く、バスなどの）利用マナーの低下が問題視されているのに、鉄道マニアがこの様な状態で良いのだろうか。決してそうではないはずだ。

「守るべきマナー」と「守らなくて良いマナー」を見極めることが必要とされても、それは絶対であることが必要とされるし、「マナーを守る」という「常識」という「ルール」を守るということを軽視することは絶対に許されないことではないだろうか。

鉄道マニアも、それ以外も、マナーに対する考えが甘すぎるという事実は決して見過ごせない。

鉄道マニアが「『マニア』は差別用語だ。『愛好家（ファン）』と呼べ」といくら抗議したところで、自分たちの行動を改めなければ、世の中の我々に対する視線が変わることは無い。

少なくとも私にとって、自分が鉄道マニアであることも、他の鉄道マニアに対しても良い印象は無いのだ。

今回の旅行では、そんな事を改めて学ばせられたし、私以外の者も少なからず学ぶべき点があったと考えさせられた。少なくとも私には納得がいかなかったのだった。

そして、私は今回の旅で学ばなかった、何も考えていない部員を同じ鉄道マニアとしても、同じ鉄研の部員としても絶対に認めるつもりは無い。

これを読んだ鉄道を趣味とする皆さん、鉄道マニアはどうあるべきかを今一度見直し、周囲からの鉄道マニアに対する理解を深めようではありませんか。

いつかは我々が「鉄道愛好家」と呼ばれる日を待ち続けて。